
蒼き雷 s o u t h e r n c r o s s 空の刀

霊宮空刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き雷 s o u t h e r n c r o s s 空の刀

【Nコード】

N 4 9 1 9 Z

【作者名】

霊宮空刀

【あらすじ】

これは、新たに生まれた空刀聖夜の物語の始まり・・・

行け、たとえ道から外れたとしても、戦え、自分の信じる者のために

今日のたった今、世界は終わろうとしていた。一人の男・・・神山零時のせいで。男は自身の持つ光の力で世界を滅ぼそうとしていた。自分を化物扱いし、一方的に攻めたこの世界に。しかし、この世界の人間も黙ってはいなかった。とある一人の少年に蒼き雷の力を宿すことに成功し、その少年に零時の軍勢と戦わせていた。そして、少年《空刀聖夜》は今、この瞬間、零時の目の前に立っていた

「ついに終わりが来たんだぜ・・・」

「アア、ソノヨウダナ。シカシ、ワタシハタツタイマヒルイナキムテキ」ニナツタ！！」

聖夜の目の前に立つ零時の姿は既に人間からはかけ離れていた。顔の半分に鉄が露出し、半分の目は赤く光り輝いている。右腕はただの腕だが、左腕には銀色の腕が取り付けられ、両脚の太もも部分には小型スラスターがついていた。それはもはや《改造人間》であった。改造の影響か、話す言葉もカタカナになっている

「さあ、終わらせてやるんだぜ！」

「カカッテコイ！！オロカナハンギャクシャヨ！！！！」

零時が両方の太ももについたスラスターを使い、一気に聖夜に迫る、

聖夜はそれをジャンプして避けると、上空から拳を落とした。しかし、零時はびくともせずに左腕をレンチ・・・レンチアームへと変え、聖夜に巻きつける

「ぐう！！！」

聖夜は巻きつかれながらもレンチに雷を流すが、聖夜の特徴を知り尽くした零時は絶縁体を身体の間をとる所に装着しているため、電気は通らずに空中へ逃がされていく

「ヨワイ、ヨワスギル！！」

「がはあ！！！！がはッ！！」

何回も地面へ叩きつけられるうちに、聖夜も痛みが薄れてきたのか思考が復活する。

「（肋骨が結構折れたな・・・もうこの身体も長くはないんだぜ。でも、一矢は報いたいんだぜ！）」

零時が聖夜を右腕に持つナイフで刺し殺そうとした途端、聖夜は零時の頭をひっつかむ。しかし、既に零時は聖夜にナイフを突き刺し、刃渡りが長かったナイフは聖夜を貫通する。しかし、聖夜は狙い通り、と口をゆがませると自身の体に電気を流しこみ始めた

「マ・・・マサカ・・・」

「手前の身体に電気が流れない・・・なら、体内に流し込めばいい。それに脳に強いショックを与えれば脳の機能は消えるはずだ・・・俺と一緒に死ぬんだぜ！！」

そう言った途端、聖夜は零時に電気を流し始める。それは自分が身体にため込まれる電気の許容量をすでに超えていて、その証拠に聖夜の意識は薄れ始めた。それでも聖夜は手に込める力を緩めずに握み続け、電気を一身に流し込む

「ガ……ガガガ……ワレハ……シナン……」

「う……るさいん……だ……ぜ……お前は……お……し、まい……だぜ……」

パタリ、と零時と聖夜が同時に倒れ、同時に息を引き取った

「……ここは……どこなんだぜ……」

次に聖夜が目覚めたのは、真っ白い空間だった。そこは常人でも普通に分かるような力で埋め尽くされていた。

『聞こえるか……雷の勇者よ』

「ツツ!!誰なんだぜ!!」

『あわてるな……私は創造神』

創造神と名乗る声はそう言つと、聖夜に問いかける。聖夜は口を動かそうとするが金縛りにあつたみたいに全身が動かない

『私は創造神として生きるのに疲れてしまった。雷の勇者よ、そのたの生きざまは素晴らしかった。その褒美に、永久の命と永久の若さ、無敵を授けよう』

「そんなのいらないんだぜ!!俺はもう死んだんだぜ!!」

拒否権は存在しない。では、力を授けよう

「!!!!!!!!!!ガッ
ああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!」

突然、聖夜の身体に何かの力が流れ込み、パタリ、と聖夜が倒れた

「ふむ……やはり器としては少し未熟か……まあいい」

声は消えると、聖夜の周りが一転する、玉座があり、周りには無数の地球がある。そんな空間で聖夜が起き上がる

「そ……んな……俺は結局、永遠の命を手にしてしまったのか。仕方ないんだぜ」

そう言うと聖夜は玉座に座り、念じる。何の意味もなく念じると、変な声が聞こえた。その声のする場所へ行こうと念じると、一発で行けた

「お前は誰だ」

「……私は鹿目まどか。今は円環の理って呼ばれているよ」

まどかはそう、言ったきりにしゃべらなくなった。聖夜は少し考え込むと、まどかの心を探ってみたが、概念化してしまっていることを確認した。

「今復活させてやるんだぜ」

そして、まどかの心を復活させた。まどかは再び光がともった瞳で、聖夜にこう言った

「改めて自己紹介するね・・・私は鹿目まどか。よろしくね」

笑みと共に差し出された右手を、聖夜は自分の右手で握り返した。

「ま、あつたのも何かの縁だな。なんか話すんだぜ」

「じゃあ・・・私の過去を話すね」

まどかは聖夜に話した。自分が生きてきたことを、自分を救うために何回も時間を繰り返した友達の事を、自分を支えてくれた先輩、友達・・・そして自分がしたことを

「・・・ツハ、次は俺の番か」

そして、聖夜は自分の過去を話した。無理矢理改造され、人類のために戦ったこと、無駄死して行った仲間たち、そして、零時との決戦、今に至るまでを

「・・・なんか、二人ともすごいことをしてきたんだね・・・」

「ま、俺は俺だし、まどかはまどかだろ」

聖夜がそう言うのと、ゲートを作り出した。聖夜がかっこいいという理由で作りに出したものだ。それをぐりぬけようとするが、その前にまどかへと振り向く

「ま、明日くらい来るわ」

「うん、待ってるよ」

「オーやろっぜ」

「出来るのかなあ・・・この空間で」

「俺はチートなんだ。そんなのお茶の子さいさいだぜ」

そう言うて聖夜はゲートをぐりぬけた。もう、自分はひとりじゃないと実感しながら

（後書き）

まどか「何で・・・今更？」

作者「作りたかったからです。 零時もなんだかんだで復活したし」

聖夜「後玲人と奏と彰一とか出すんだろ。一発キャラで」

作者「ま、それはまた今度」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4919z/>

蒼き雷 s o u t h e r n c r o s s 空の刀

2011年12月16日19時52分発行